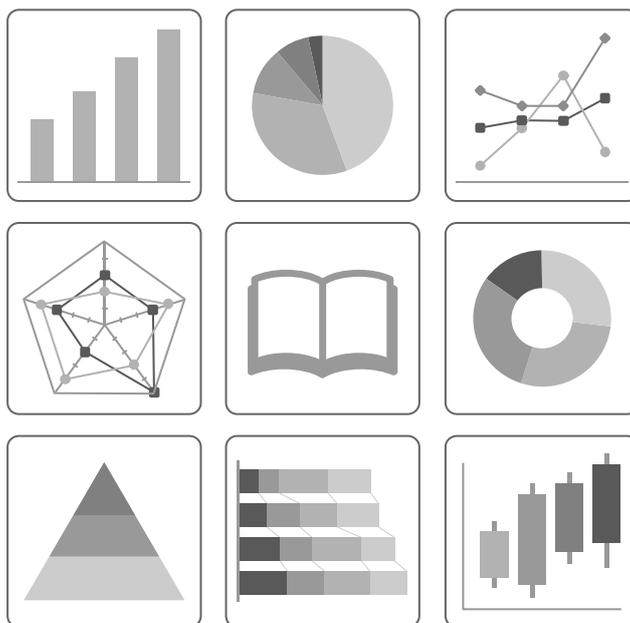


# 船橋市

## 子どもの生活実態に関するアンケート調査 (ヤングケアラー実態調査) 結果報告書【概要版】



令和4年9月

船橋市

## 調査の概要

### 1 調査の目的

本来大人が担うと想定されているような家事や家族の世話を日常的に行うヤングケアラーの実態を把握するため、小学4年生から中学3年生及び高校生相当年齢の子どもたちを対象に実態調査を実施する。

また、この調査を通じて認知度の向上を図るとともに、子どもやその家族への必要な支援策や、支援体制の構築等を検討する。

### 2 調査対象

船橋市立学校及び特別支援学校の小学4年生～中学3年生、船橋市在住の高校生相当年齢の子ども

### 3 回収状況

対象	対象者数	回答数	回収率
小学生調査（4, 5, 6年生）	17,025人	11,342件	66.6%
中高生調査	32,530人	11,422件	35.1%
中学生（1, 2, 3年生）	15,668人	10,114件	64.6%
高校生相当（H16年4月2日～ H19年4月1日生まれ）	16,862人	1,279件	7.6%
学年・年齢回答なし	—	29件	—
合計	49,555人	22,764件	45.9%

### 4 調査方法

WEB上のアンケートフォームによる調査。市立小・中学校及び特別支援学校の児童生徒は、各学校を通じて、子どもに付与されている1人1台端末を用いて実施。高校生等は当該URL及び二次元コードが記載された案内を郵送で送付。

### 5 調査期間

令和4年5月6日から令和4年5月27日

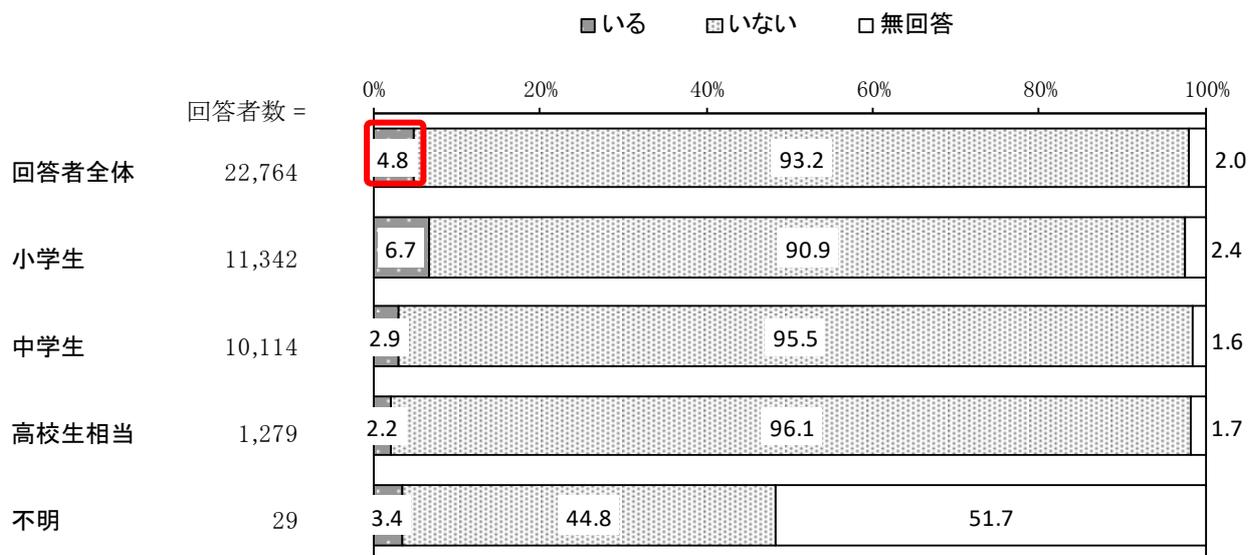
## 世話をしている家族の有無、それによる体調や生活への影響

○世話をしている家族が「いる」と回答したのは、回答者全体の4.8%となっている。

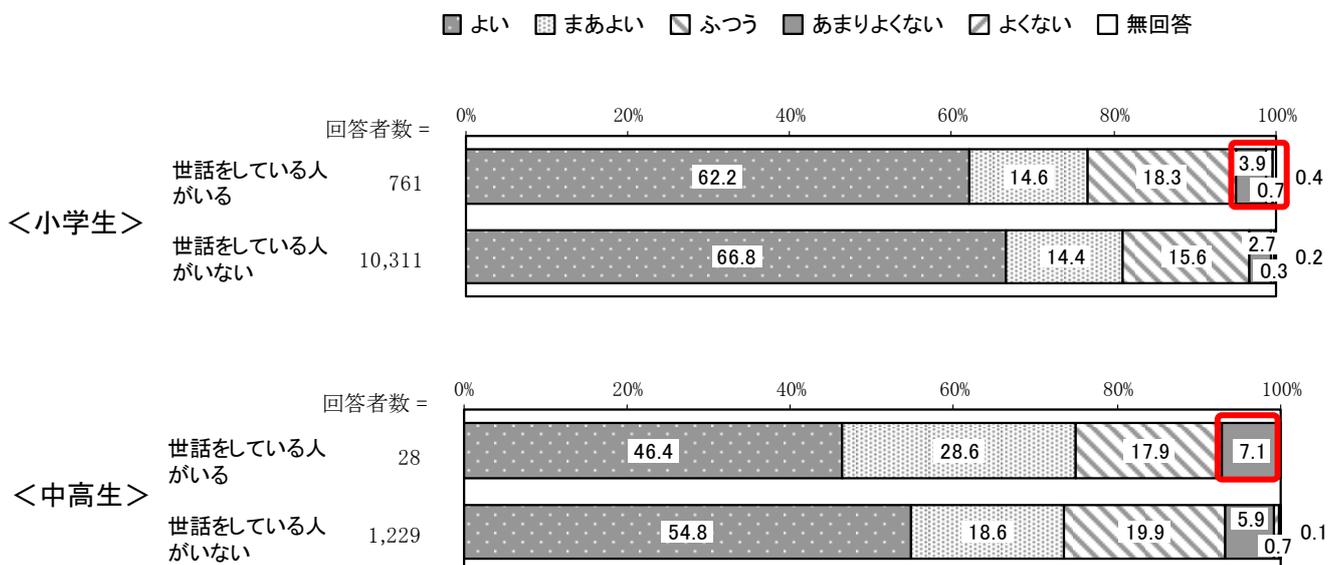
(小学生6.7%、中学生2.9%、高校生相当2.2%)

○世話をしている人のほうが、世話をしていない人に比べ、「体調がよくない」「体調があまりよくない」を合わせた割合が高い。

○世話をしていることによる生活への影響は、「自分の時間がとれない」が小学生で8.5%、中高生で11.8%と最も多かった。なお、「特にない」は小学生で51%、中高生で39.3%となっている。

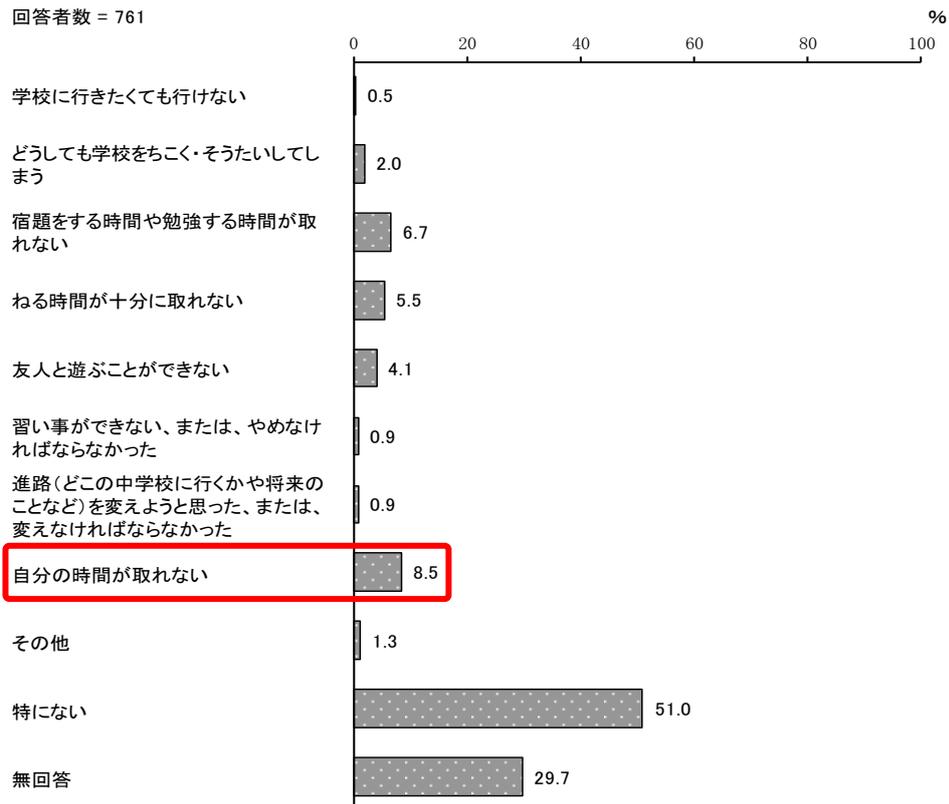


### 【世話をしていることによる体調への影響】

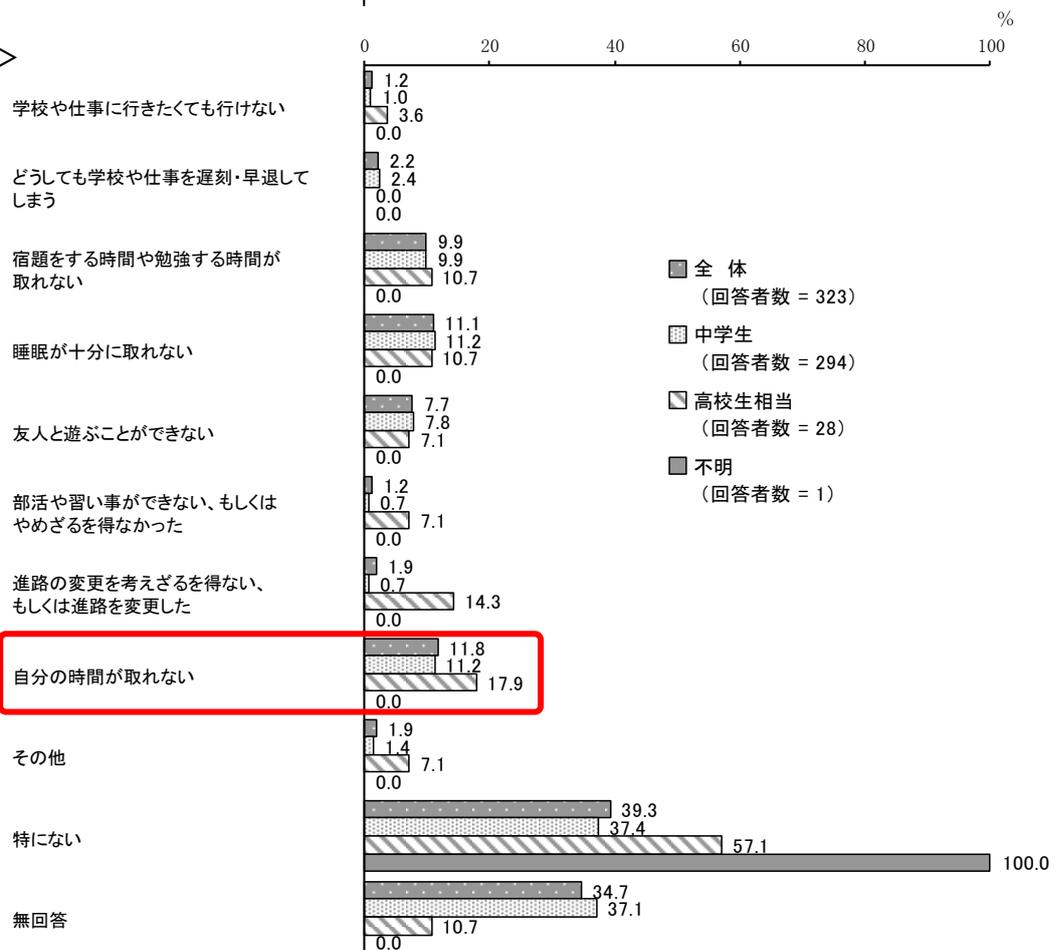


【世話をしていることによる生活への影響】

＜小学生＞ 回答者数 = 761



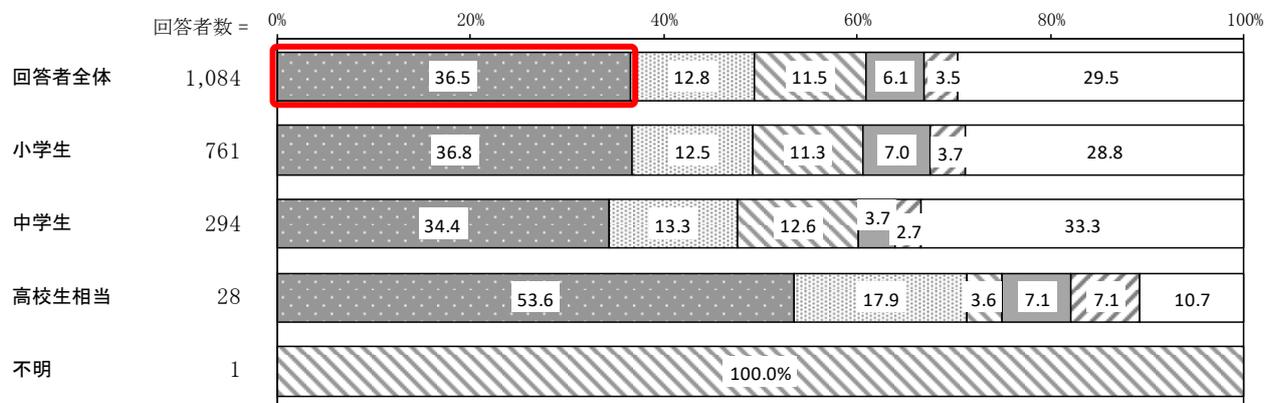
＜中高生＞



## 世話をしている頻度

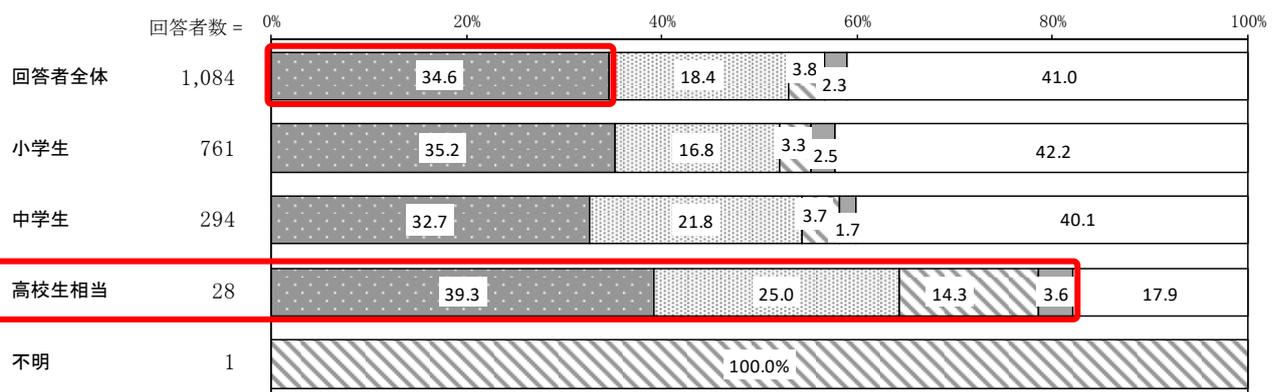
- 「ほぼ毎日世話をしている」と回答したのは、回答者全体の 36.5% となっている。  
(小学生 36.8%、中学生 34.4%、高校生相当 53.6%)
- 1日の世話時間(平日)は全体で「3時間未満」が 34.6% で最も多く、次いで「3時間以上～7時間未満」が 18.4% となっている。  
(3時間未満：小学生 35.2%、中学生 32.7%、高校生相当 39.3%)
- 1日の世話時間は、年齢が高くなるにつれて増える傾向が見られた。

□ほぼ毎日 □週に3～5日 □週に1～2日 □1か月に数日 □その他 □無回答



### < 1日の世話時間(平日) >

□3時間未満 □3時間以上～7時間未満 □7時間以上～12時間未満 □12時間以上 □無回答

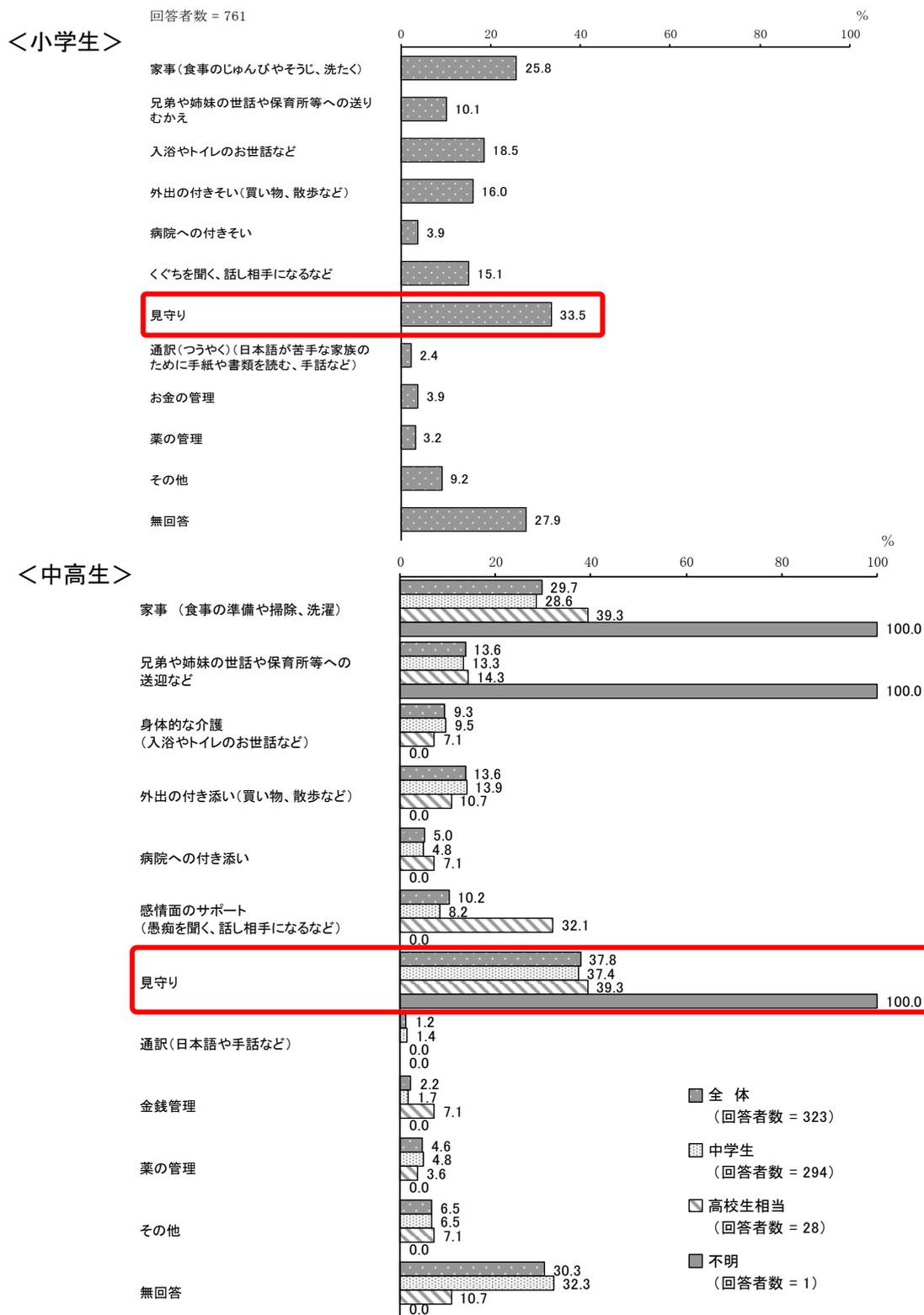


## お世話の内容

○世話をしている内容は、小学生、中高生ともに「見守り」が最も多い。

(小学生 33.5%、中学生 37.4%、高校生相当 39.3%)

○世話の対象者別で世話の内容をみると、「母親（お母さん）」、「父親（お父さん）」、「祖母」では「家事」の割合が高くなっている。また、「おばあちゃん」、「祖父（おじいちゃん）」、「妹・弟」、中高生の「姉・兄」では「見守り」の割合が高くなっている。



【世話の対象者別（全体）】

<小学生>

単位：%

区分	回答者数（件）	家事（食事のじゅんぴやそうじ、洗たく）	兄弟や姉妹の世話や保育所等への送りむかえ	入浴やトイレのお世話など	外出の付きそい（買い物、散歩など）	病院への付きそい	ぐちを聞く、話し相手になるなど	見守り	通訳（つうやく）（日本語が苦手な家族のために手紙や書類を読む、手話など）	お金の管理	薬の管理	その他	無回答
お母さん	189	50.3	8.5	10.6	21.7	7.4	7.9	17.5	3.7	5.8	4.2	3.7	28.0
お父さん	63	33.3	7.9	12.7	19.0	4.8	4.8	14.3	7.9	11.1	3.2	4.8	36.5
おばあちゃん	49	38.8	2.0	12.2	20.4	6.1	12.2	40.8	2.0	4.1	8.2	4.1	6.1
おじいちゃん	22	27.3	4.5	22.7	27.3	9.1	22.7	45.5	-	4.5	4.5	4.5	-
姉・兄	39	17.9	7.7	17.9	15.4	5.1	28.2	17.9	2.6	7.7	-	12.8	15.4
妹・弟	313	17.6	16.9	30.4	15.7	1.9	23.0	55.6	1.3	1.9	1.6	9.9	7.0
その他	57	19.3	1.8	8.8	8.8	3.5	7.0	28.1	-	-	3.5	40.4	26.3

<中高生>

単位：%

区分	回答者数（件）	家事（食事の準備や掃除、洗濯）	兄弟や姉妹の世話や保育所等への送迎など	身体的な介護（入浴やトイレのお世話など）	外出の付き添い（買い物、散歩など）	病院への付き添い	感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）	見守り	通訳（日本語や手話など）	金銭管理	薬の管理	その他	無回答
母親	59	64.4	11.9	5.1	16.9	10.2	16.9	16.9	5.1	5.1	11.9	3.4	16.9
父親	16	37.5	25.0	-	12.5	6.3	18.8	31.3	-	-	6.3	12.5	18.8
祖母	17	58.8	-	5.9	29.4	17.6	35.3	35.3	5.9	5.9	23.5	5.9	-
祖父	7	42.9	-	28.6	14.3	14.3	-	71.4	-	14.3	28.6	-	-
姉・兄	12	33.3	16.7	8.3	16.7	-	8.3	66.7	-	-	-	-	8.3
妹・弟	133	28.6	25.6	14.3	17.3	2.3	11.3	66.2	-	1.5	1.5	3.8	3.0
その他	18	16.7	-	22.2	5.6	11.1	-	33.3	-	-	-	61.1	16.7

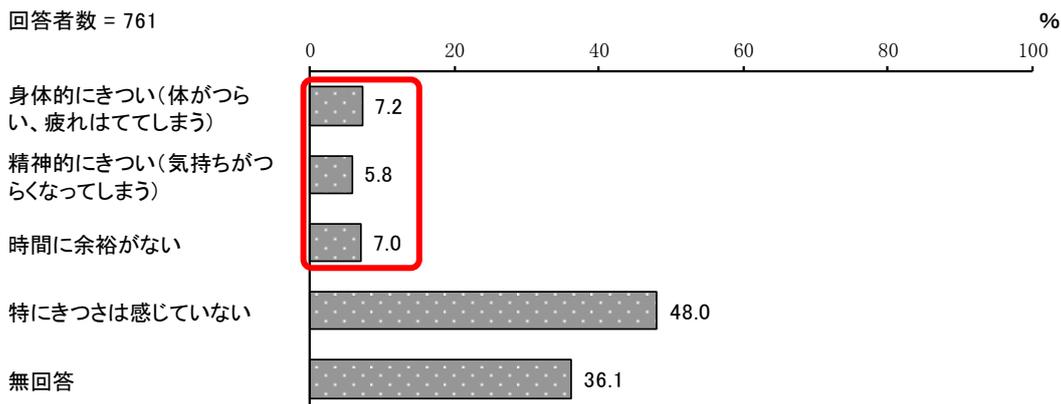
## お世話のきつさ

○小学生では「身体的にきつい」の割合が 7.2%、「時間に余裕がない」の割合が 7.0% となっている。また、「特にきつさは感じていない」の割合は 48.0% となっている。

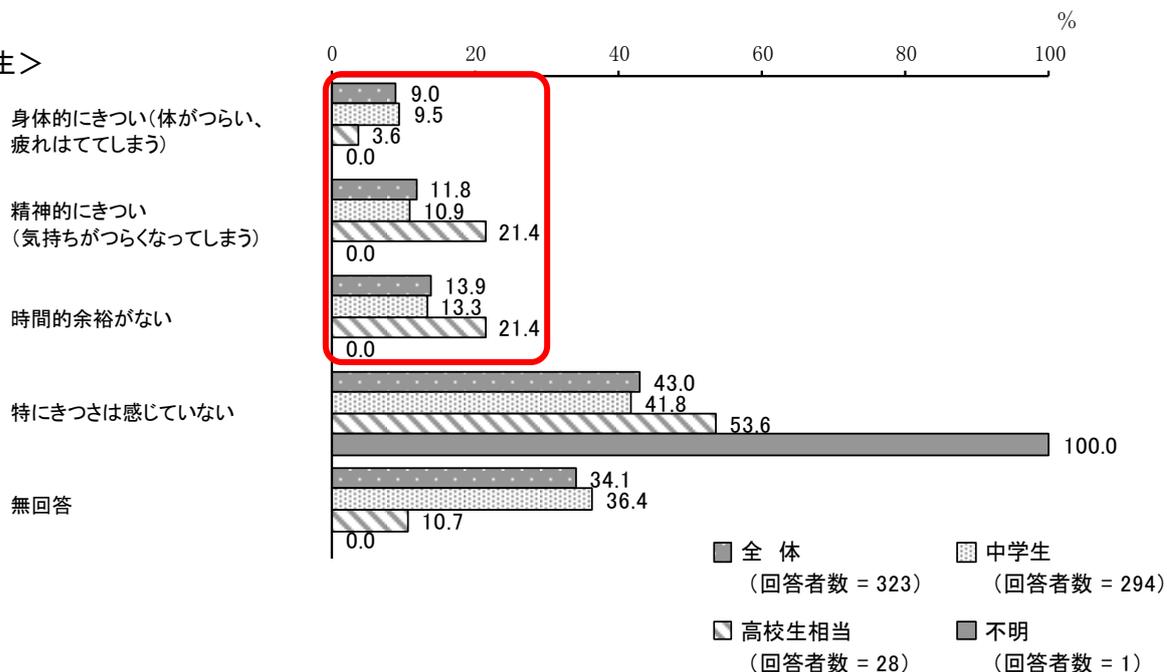
○中高生では、「精神的にきつい」の割合が 11.8%、「時間的余裕がない」の割合が 13.9% となっている。また、「特にきつさは感じていない」の割合は 43.0% となっている。

### <小学生>

回答者数 = 761



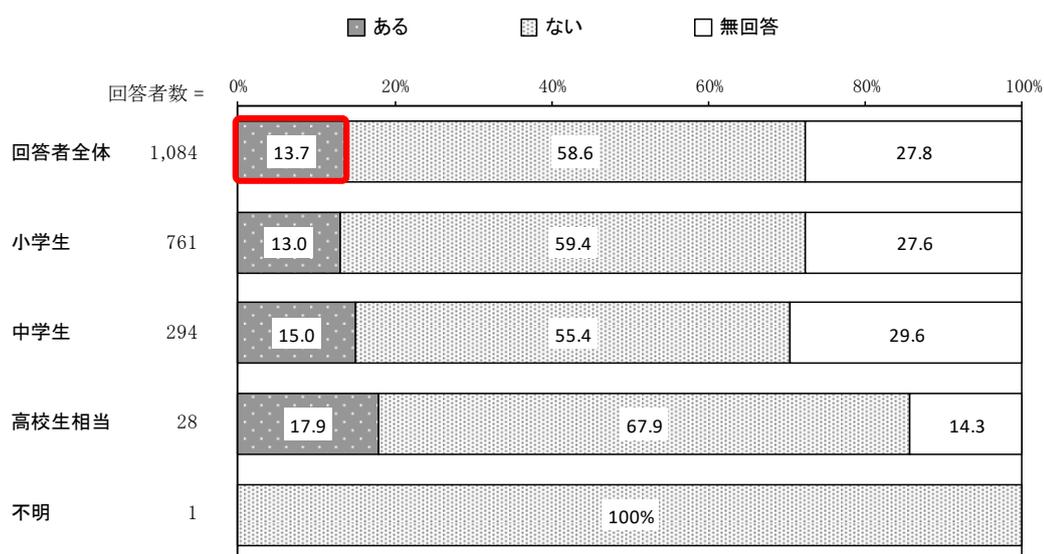
### <中高生>



## 相談の有無

○相談をしたことが「ある」人は、回答者全体の 13.7%にとどまり、半数以上が相談したことは「ない」と回答している。

(小学生 13.0%、中学生 15.0%、高校生相当 17.9%)

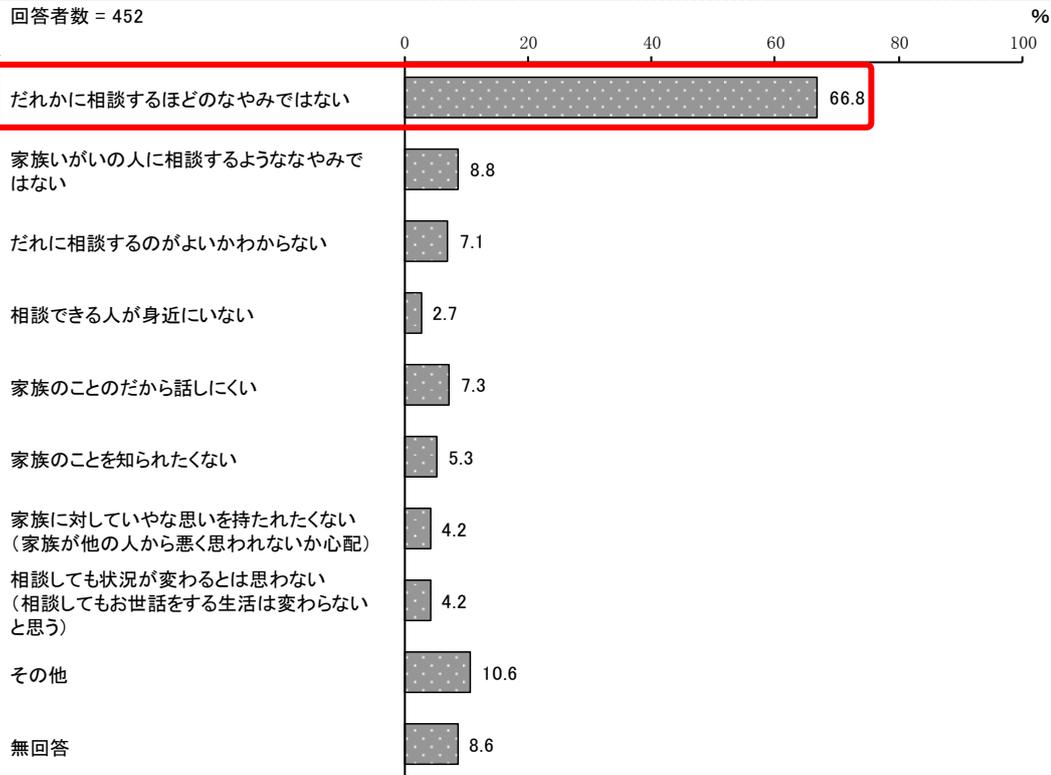


## 相談しない理由

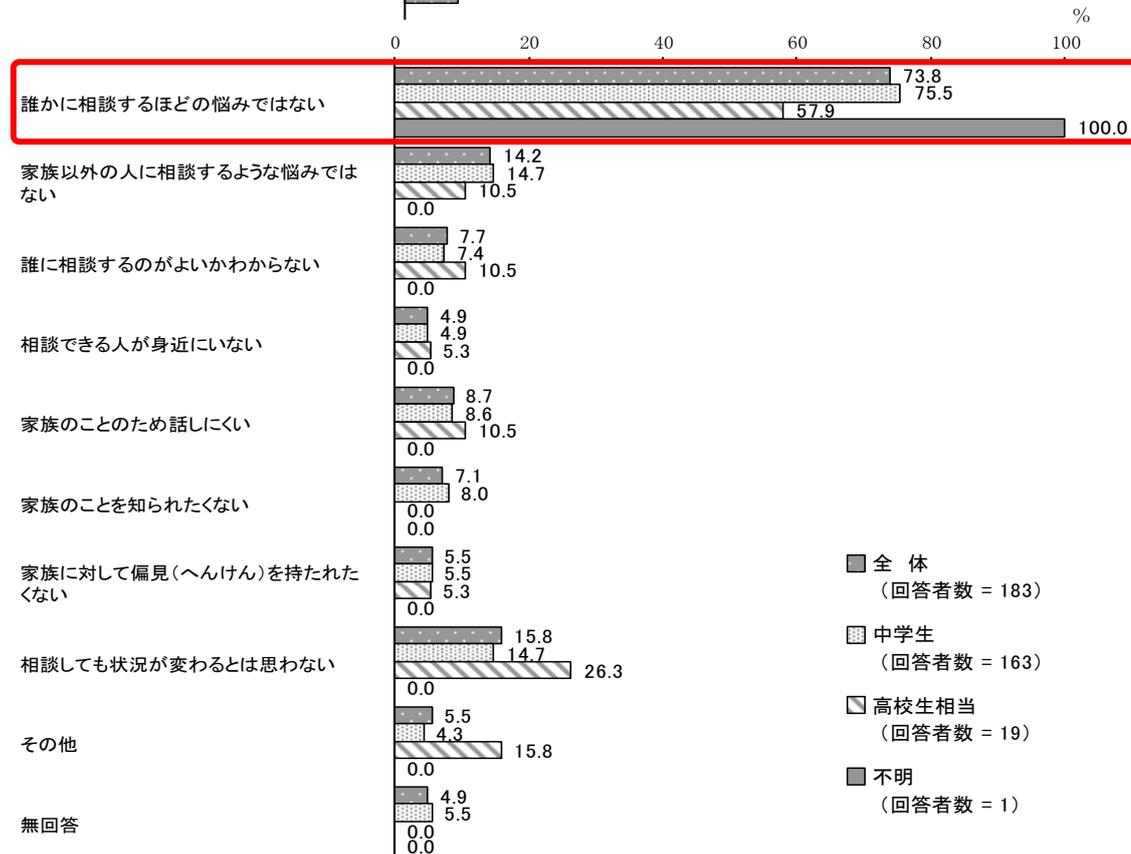
○「誰かに相談するほどの悩みではない」が小学生で66.8%、中学生で73.8%と最も高くなっている。

回答者数 = 452

<小学生>

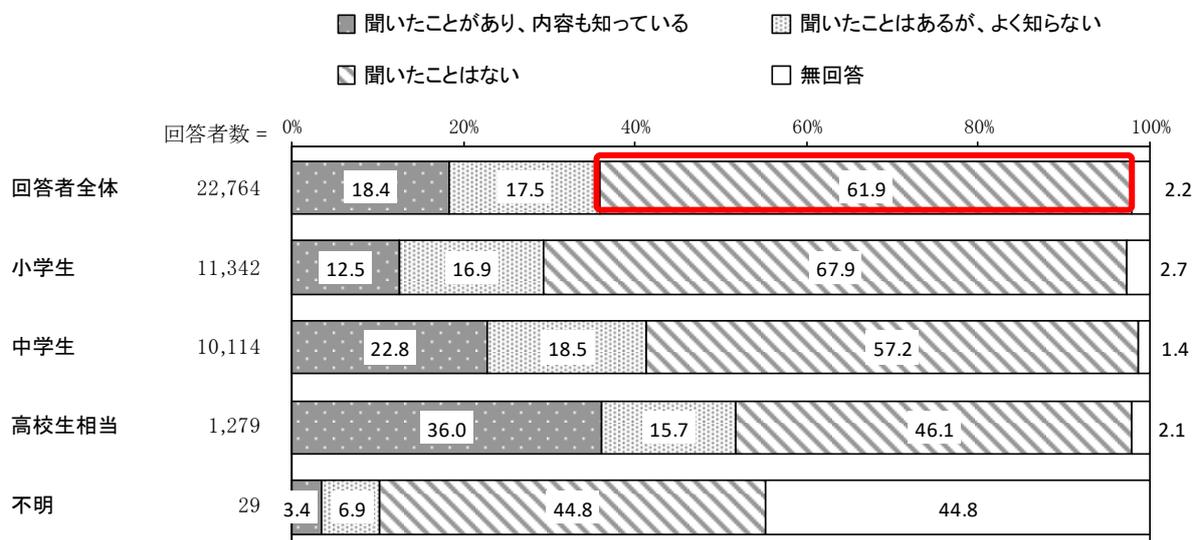


<中学生>



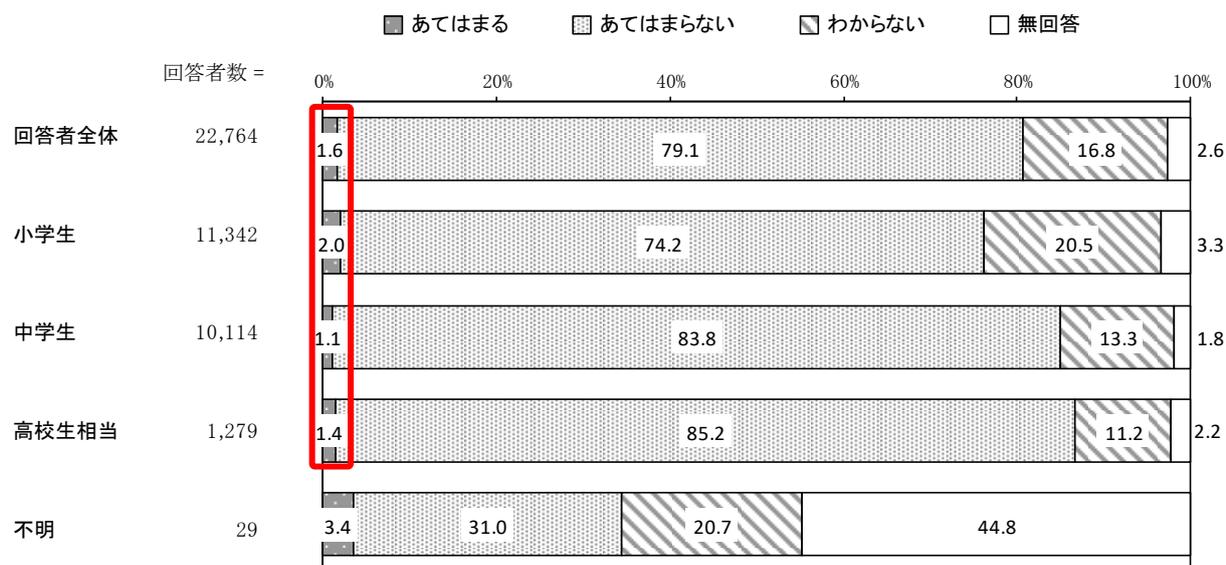
## ヤングケアラーの認知度

○「ヤングケアラーという言葉聞いたことはない」の割合が回答者全体の 61.9% と最も高くなっている。(小学生 67.9%、中学生 57.2%、高校生相当 46.1%)



## 自分をヤングケアラーだと思うか

○「自分がヤングケアラーにあてはまると思う」の割合が回答者全体の 1.6% となっている。(小学生 2.0%、中学生 1.1%、高校生相当 1.4%)



## 調査結果からみえる課題

- これらの調査結果を踏まえると、自分自身の時間の大部分を家族のケアに充てることで、学習時間や睡眠時間の減少につながり、結果として、学力低下や心身の健康状態の悪化につながる可能性があると考えられる。
- また、家庭内で家事を担うことは、必ずしも問題につながるとは限らないが、学校生活に支障をきたすような程度の負担を子どもが担うことは、子どもが持つ権利が侵害される状況でもあり、また日常生活にも大きな影響を及ぼすことにもつながり、早急な支援が求められる。
- 早期発見のためには、子ども自身が置かれた状況を認識することが大切であり、そのためにも、ヤングケアラーの正しい認識について広めていくこと、また、そのような状態に陥ったときでも、支援の手段があることについて、周知啓発をしていくことが重要となる。
- さらに、ヤングケアラーが家庭内のプライベートな問題であることから、支援が必要な状況にあっても表面化しづらい構造であることが指摘されている。そのため、そのような状態に陥ったことを、学校等での気づきによる早期発見が可能な体制づくり、また、子どもが助けを必要とする状態になったとき、声をあげられる関係づくりや環境づくりが求められる。
- 同時に、子どもが支援を必要とする場合においても、デリケートな問題であることを踏まえ、まずはしっかりと子どもの話を聞き、そして子どもに寄り添う姿勢が求められる。
- なお、今回の調査で回答しなかった層にも、一定程度の支援が必要なヤングケアラーが存在している可能性があることも考慮する必要がある。